

昭和の戦争と桶川

展示期間

平成30年8月5日（日）～8月19日（日）

I 戦時に向かう桶川

この写真は、昭和4年（1929）4月に撮影された荒川河川改修川田谷工場の写真です。蒸気機関車にけん引された大型の掘削機とともに誇らしげな男たちの姿が写っています。写真の裏には、次のように記されています。

「日賃一円弍十銭人夫近藤金作」

この工事は、金融恐慌による不景気を乗り切るために、田中義一内閣の大蔵大臣高橋是清の下で、公債発行による経済対策の一環として行われたものでした。不況の中、桶川の人々も数多く参加し、賃金を得たと伝えられています。



一方、昭和6年（1931）の満州事変を経て、昭和11年（1936）にいわゆる二・二六事件がおり、高橋是清は暗殺されてしまいます。

以後、経済的苦境を脱しようとする日本は、大陸への進出を本格化し、昭和12年（1937）には日中戦争が始まります。昭和20年（1945）8月15日の終戦まで、昭和の日本は長い戦時に入っていきます。

二・二六事件と郷土兵

二・二六事件は、昭和11年（1936）2月26日に発生した陸軍の青年将校らが東京市内で起こしたクーデター未遂事件です。

青年将校と行動をともにした歩兵第1・第3連隊、近衛歩兵第3連隊など約1500人の兵士は、首相官邸、内大臣邸、教育総監邸、警視庁や新聞社などを襲撃し、三宅坂から永田町一帯を占拠し、翌27日には、東京に戒厳令がしかれています。

動員された兵士の半数以上は埼玉県出身者でした。昭和56年に埼玉県により編集発行された『二・二六事件と郷土兵』には、桶川出身の元兵士の手記も寄せられています。



二月二六日〇三・〇〇突然非常呼集がかかった。スワツと飛起きてみると班内に電燈がついていて班長から「服装は二装着用、外套を着る、ゆっくり仕度せよ」との指示があった。

約一時間ぐらい行進した頃、大きな屋敷の付近で又銃休けいした。間もなく集合となり改めて出動目的を知らされた。

私は驚いた。目前とは鈴木侍従長官邸であり、これを襲撃して侍従長を倒すことであった。ここで各小隊の任務と行動が示され〇五・〇〇を期して襲撃を開始した。

増田 喬氏の手記より

1. 旧熊谷陸軍飛行学校

桶川市の西端、現在、ホンダエアポートがある荒川の河川敷を望む若宮台と呼ばれる高台に、昭和の戦争の記憶を伝える「旧熊谷陸軍飛行学校桶川分教場建物」が残されています。

旧陸軍飛行学校として使用されていた建物群が現存する希少性の高い歴史的遺産として、平成28年2月29日には、守衛棟・車庫棟・兵舎棟・便所棟・弾薬庫の5棟が、桶川市指定文化財（有形文化財 建造物）となりました。

熊谷陸軍飛行学校桶川分教場は、昭和10年（1935）12月に開校した熊谷陸軍飛行学校の分教場として、昭和12年（1937）6月、埼玉県北足立郡川田谷村に開校しました。

ここでは、少年飛行兵（少飛）、学徒出陣の特別操縦見習士官（特操）などの飛行機操縦の基本教育が行われ、20期余り、推定1,500～1,600名の飛行兵を養成し、戦地に送り出しました。

昭和18年（1943）9月に卒業した小飛第12期生は45名中18名が、昭和19年（1944）3月卒業の特操第1期生は80余名中20名近くが戦死しています。

昭和20年（1945）2月、陸軍航空教育部隊の改編に伴い、熊谷陸軍飛行学校が廃されたことを受けて、分教場としての役割を終えました。

2. 少年と空へのあこがれ

『少年倶楽部』は、大正3年（1914）に創刊され、昭和11年（1936）には75万部の発行部数を誇った戦前の大衆文化を代表する少年雑誌でした。

展示資料は、昭和12年（1937）の夏休み大愉快号であり、付録のほか、紙飛行機の作り方の図解があり、当時の少年たちの飛行機によせる思いが伝わってきます。

付録のペーパークラフトの「神風号」は、試作軍用機の払い下げを受けた朝日新聞の社有機で、この年の4月に、イギリス国王の戴冠祝賀に向い、立川飛行場からロンドンまでの間15,357kmを94時間17分56秒（実飛行時間51時間余）で飛ぶという快挙をなしとげました。

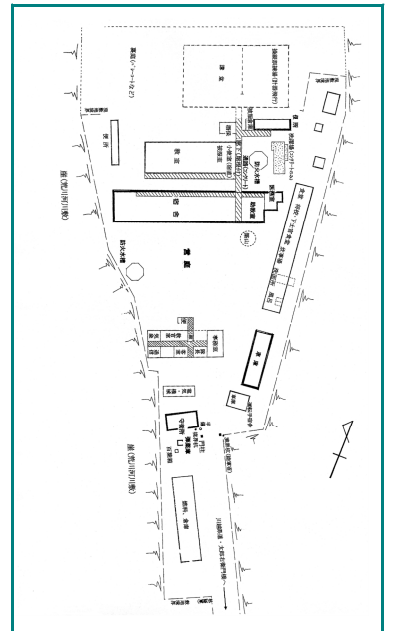
国産の飛行機が、日本人パイロットの操縦で記録を達成したことから、国民は熱狂し、少年たちに空へのあこがれを呼び起こした名機として知られています。

昭和12年、日中戦争が始まった後、少年雑誌も軍の検閲を受けるようになり、その記事も戦争と関連するものが多くなります。

3. 熊谷陸軍飛行学校桶川分教場の日々

熊谷陸軍飛行学校桶川分教場がもっとも多くの子供を受け入れていた昭和18年から19年にかけて、伍井芳夫（いついよしお）中尉は、教官として飛行学校を差配していました。伍井中尉は、下士官時代から桶川分教場の教官を務め、温厚、誠実な教官として、多くの出身者の記憶に残っています。ここに掲げた写真は、ご家族に伝えられた伍井氏の写真帖によるものです。

昭和18年から始まる特別操縦見習士官制度においては、熊谷陸軍飛行学校が主に学徒を受入れました。募集宣伝のために朝日新聞社から刊行された『写真報道 学鷲』には、桶川分教場で撮影された写真が掲載されており、伍井氏の写真帖の写真も同社のカメラマンが撮影したものと伝えられています。



建物配置図



兵舎棟



『少年倶楽部』昭和12年



『少年倶楽部』付録 神風号



『写真報道 学鷲』昭和19年

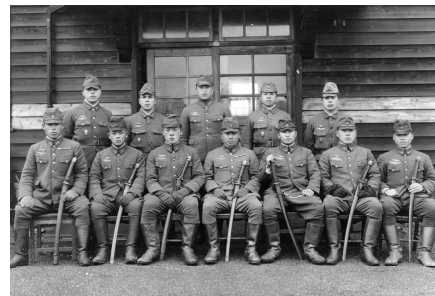
伍井氏は、明治45年（1912）7月に加須市（旧大利根町豊野）に生まれ、旧制不動岡中学卒業後に航空兵を志願し、航空士官学校を経て熊谷陸軍飛行学校の教官となり、陸軍の操縦教育の分野で重きをなしていました。



九五式一型練習機乙型（通称 赤とんぼ）



昭和20年に至り、満32歳にして、園子夫人と3人の子供を残して、陸軍特別攻撃隊第23振武隊隊長として3月27日に栃木県壬生飛行場を飛び立ち、家族の暮らす桶川町上空を経て鹿児島県知覧に向かいました。そして、4月1日に沖縄の海に出撃されています。



出撃前にする伍井大尉と第23振武隊の隊員たち

II 兵士の肖像

戦前においては、大日本帝国憲法のもとで国民皆兵の理念にしたがい、すべての国民は兵役の義務を負っていました。

小川徳治氏と軍装品

これらの資料は、川田谷の小川家から寄贈を受けたものです。大正9年（1920）に川田谷村で生まれた小川徳治氏は、昭和15年（1940）に近衛師団に入隊しました。その後、中国湖北省を経て、昭和17年（1942）11月に激戦地であったブーゲンビル島に上陸し、終戦を迎えています。

小川氏は、昭和21年（1946）2月22日に、無事、故郷に復員を遂げています。

展示資料は、復員時に小川氏が身につけていた軍装品です。兵士の姿を伝える軍服や背囊（はいのう）と、錠剤やクレオソート丸など、兵士の暮らしを知る携帯品が伝えられています。

小川氏は、戦後も、これらの軍装品を大切に手入れしていたそうです。



小川徳治氏の出征 樋詰氷川神社



略帽と軍衣



背囊（大正6年製）



携行薬
クレオソート丸 錠剤

III 戦時の暮らし

昭和12年（1937）7月に日中戦争が始まり、同年9月、近衛内閣は「国民精神総動員」を政策にかかげ、続いて昭和13年7月には「国家総動員法」が成立し、戦時体制が形作られ、すべてにおいて軍需が優先し、民需はぎりぎりまで切り詰められていきました。

1. 戦時の暮らし

太平洋戦争が始まる直前の昭和16年（1941）4月1日からは、主食の配給制度が始まり、酒、木炭、衣料などの生活必需品もこれに続きました。「贅沢は敵だ！」「欲しがりません勝つまでは」「全てを戦争へ」などの標語がつくられ、国民は、戦争への協力を求められていきました。

さらに、徴兵によって成人男性は戦地におもむき、女性や学生たちが、いわゆる「銃後の守り」を担うことになり、労働や防空などの負担も増していきました。

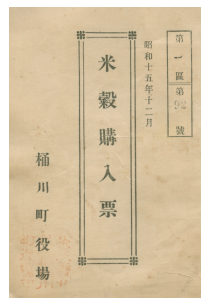


『主婦の友』昭和17年12月号

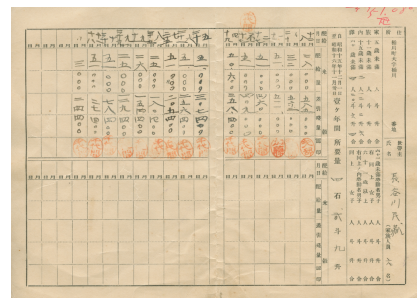
桶川市内でも、国民服を着た男性、モンペに防空頭巾を着けた女性が、防空訓練にあたる姿の写真が残されています。



防空訓練（桶川町）



米穀購入票



2. 戦時の学校 ―川田谷国民学校―

日中戦争から太平洋戦争へと進む戦時下にあって、昭和16年（1941）4月1日、明治以来の尋常小学校及び高等科は国民学校と改められました。国民学校では、軍事優先の総動員体制が求める国民の育成が教育の目的とされました。

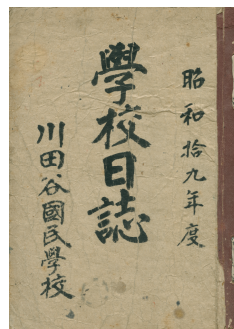
戦争がいよいよ激しさを増す昭和19年（1944）の学校日誌の記事には、「青少年航空訓練」、「勤労奉仕」と、年長の高等科の生徒や教師が動員されている記述が多くなります。

昭和19年（1944）6月に日本本土を目前とするサイパン島への攻撃が始まると同時に、学童疎開が始まります。昭和19年の「疎開入学児童簿」には縁故をたよって川田谷村にやってきた疎開児童名が記載されています。

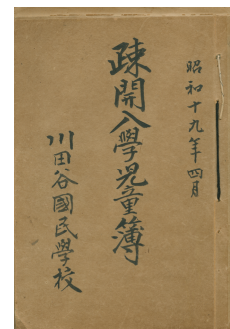
やがて、学校日誌にも空襲警報の記事が見られるようになり、桶川の子供たちにとっても、戦争が身近なものとなっていく様子が分かります。



川田谷国民学校集合写真（昭和19年度）



学校日誌（昭和19年度）



疎開入学児童簿（昭和19年4月）

3. 皇国第一八八八工場

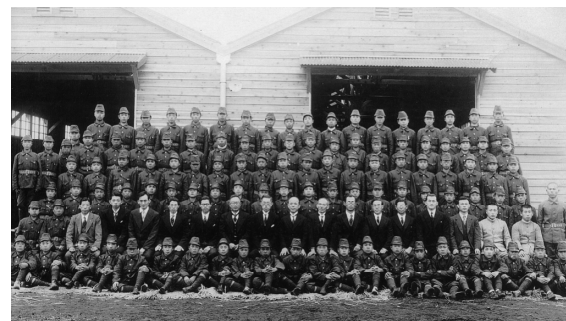
現在は商業施設や住宅団地となっている桶川駅の西側は、昭和56年まで三井精機株式会社桶川製作所の敷地でした。

この工場は、太平洋戦争開戦の前年、昭和15年（1940）に三井工作機株式会社桶川製作所として設立され、昭和20年8月15日の終戦まで「皇国第一八八八工場」として軍需生産の一翼を担っていました。

勤労課長兼厚生課長であった石亀繁太郎氏は、戦時中のできごとを日誌に記し、戦後、昭和63年（1988）に『皇国第一八八八工場』として出版されています。この著書により、戦時中の工場の様子を知ることができます。

桶川製作所では、設立時から少年工を採用し、工場内には国民学校に続く教育機関である青年学校が設置されていました。

昭和19年の年末において、桶川製作所で働く人々は3,545名に達していました。また、工場からは520名の人々が出征しており、勤労者の不足を女子挺身隊や熊谷中学（現在の県立熊谷高校）などからの動員学徒が補い、生産を支えていました。



工場に付属する青年学校に入校した少年工



所長訓話 昭和18年7月8日